

虐待児とその保護者支援に向けて

Support for Abused Children and Their Guardians

本山 芳男
Yoshio MOTOYAMA

キーワード：愛着 世代間連鎖 誘発要因 補償要因 児童福祉法第 27 条第 1 項 2 号

1 はじめに

「事故進化論」という言葉がある。その意味はとてつもない事故が起きると、原因を究明し、今後の対策を考え、二度とそのような事が起きないようにすることを意味している。つまり、事故を契機により良いものに進化していくことである。そのことになぞらえて虐待による死亡事故が起きた自治体では、死亡事例検証委員会が立ち上げられている。そこでは事例に関わった児童相談所をはじめ、関係機関の職員に事情聴取をして検証し、同じ轍を踏まないようにするというものである。その死亡事例検証委員会の報告の中でなされている共通内容として、関わった機関の状況認識の甘さや情報共有の不十分さなどが挙げられている。幾度となく示されている検証結果にもかかわらず、悲惨な虐待死が起きている。その理由のひとつとして、収集した情報への意味付けの不十分さがあると思われる。

本稿では、先人の文献を参考に必要な情報並びにそれへの意味付けと支援の在り方を、

次の四つの側面から考究する。ひとつ目は子育て、二つ目は虐待の世代間連鎖、三つ目は社会診断への取り組み、そして最後に虐待児並びに保護者支援である。

2 子育て

子どもの育ちについては、J. ボウルヴィーの愛着理論と A. マズローの欲求階層説そして E.H エリクソンの心理社会的発達段階から論考したい。

(1) J. ボウルヴィーの愛着理論

人は生まれながらに素晴らしい力を持ち合わせてこの世に生まれてくるものである。例を挙げれば、外界の見え方である。本来網膜上には倒立画像が映し出されているはずであるが、実際には倒立した画像と認識せず、正立画像として外観を認識していること、そしてファンツの実験が示しているように乳幼児の前にスクリーンをおいて、猿や人間の顔の画像を映すと、その視線は眼のあたりを凝視するなどである。倒立して見えているはずの像が正立画像と認識され、スクリーン上の画

像の目を凝視することについての説明はできないが、敢えて言うなら生まれたときから人間社会で生活するように出来ているとしか言いようがない。

J. ボウルヴィーの愛着もそうである。彼は愛着形成を四つの段階で示している。第一段階は誰にでも反応するというものである。これは生理的微笑と言われる原始反射である。生後間もなく目も見えない状況の中で、新生児は時折、ニツタと笑う。それを見た母親は、“可愛らしい”という思いが誘発され、子どもにも声かけする。つまり乳児の方から母親の随伴行動を誘発しているのである。第二段階は、子どもが自分の世話をしてくれる人へ反応をし、第三段階は特定の養育してくれる人への反応をするようになる。そして第四段階は、自分の世話をしてくれている特定の人の意図をくみ取り、そして自分の気持ちとの調整を図るようになる。この第四段階で、保護者の行動枠を子どもが内面化し始め、保護者との結びつきがしっかりとすると愛着が形成されたという。その後の様々な子どもの考え方や対人関係に波及していくのである。J. ボウルヴィーが示す愛着形成は、子どもが生来的に持ち合わせているものでもある。しかし子どもの中には自閉症、アスペルガー症候群などのようにたまたま障害を背負って生まれたために生来的に愛着が形成され難い子もいるが、基本的に関わり手次第で愛着は形成されるものである。

(2) A. マズローの欲求階層説

A. マズローは人の欲求を「欠乏動機づけ」

と「成長動機づけ」に二分類している。「欠乏動機づけ」は、最下層に「生理的欲求」、その上位に「安心・安全の欲求」、さらに「帰属、愛情の欲求」と積み上げたものからなっている。「成長動機づけ」は「欠乏動機づけ」の上位に「自尊欲求」「自己実現欲求」と積み上げられたもので構成されている。

A. マズローの欠乏動機づけは、本来保護者から子どもが充足されるべきもので、子どもにとっては当然の権利であり、児童の権利条約の「生きる権利」、「保護される権利」に該当するものである。この欠乏動機づけが十分に満たされて、次の「自尊欲求」、「自己実現欲求」と言う自分自身で充足する成長動機づけへ続いていく。

この欠乏動機づけが十分に満たされないことは、次の点が関係している。ひとつは保護者の関わり方の不適切さ、二つ目は子どもが障害を持っているために発達がゆっくりしている、三つ目はひとつ目と二つ目の交互作用である。このいずれかによって、欠乏動機付けが満たされず、自分を世話をしてくれる人との結びつく力が弱くなるものと思われる。

欠乏動機付けが充足された結果、その後に続く成長動機付けが発動することになる。この成長動機付けは、周りの人から満たしてもらうものではなく、自分自身で充足するもので、成長動機付けの一番根底にあるのは自尊感情の欲求である。この自尊感情の欲求というのは、自分は社会の中で価値ある存在でありたい、社会のなかで受け入れられたい、そして自分の周りの人も大切にしたいという気持ちと言える。それが低い状態というのは、

“自分は価値のない存在”、という気持ちが充満し、周りの人の気持ちや心の痛みを無意識的に理解したとしても、実際場面では相手の思いに無関心になり、周りの人が困る、嫌がることがしてしまうことになる。この状態というのが、J. ボウルヴィーが生来的に持っているとしている第四段階の内容と真反対の行動をすることを示している。つまり、自分の世話をしてくれている特定の人の意に添わない行動をすることになる。

社会的養護を必要として児童養護施設等に入所している子どもたちへの支援目標のひとつとして、自立支援がある。そして自立に向けて個別に自立支援計画がたてられているが、その中で子どもの自尊感情を醸成していくことが要である。そのために施設職員は、日々の生活の中で肯定的なエネルギーを子どもに供給しているのである。

(3) E.H エリクソンの心理社会的発達段階

ジグムント フロイドから袂を分かち、娘のアンナ フロイドに師事したE.H エリクソンが「八の心理社会的発達段階」を提唱した。

E.H エリクソンの理論の特徴は、発達の対課題の相克の中で、どちらも必要なことだが、終局的には片方が、もう一方を凌駕していくことを唱えている点である。E.H エリクソンが唱えた八つの心理社会的サイクルは、第一段階「基本的信頼 vs. 不信」、第二段階「自律性 vs. 恥、疑惑」、第三段階「自主性 vs. 罪悪感」、第四段階「勤勉性 vs. 劣等感」、第五段階「同一性 vs. 同一性の拡散」、第六段階「親密性 vs. 孤独」、第七段階「生殖 vs. 自己吸収」、

そして第八段階「自己統治 vs. 絶望」である。

今回 E.H エリクソンに着目した理由として、各段階において自分を取り巻く環境をどのように認識したかによって対課題のどちらか一方に偏った認識をし、それで周りの事柄へ対処しているという点である。第一段階「基本的信頼 vs. 不信」において、乳児はお腹が空けば泣く。そしてそれを見た母親は、「〇〇ちゃん、おっぱい欲しいのね」と授乳する。この連続の中で、乳児は自分の欲求が満たされて心地よい状況になると言える。しかし、母親とていつも乳児の側にいるとは限らない、子どもが泣いても手が離せないときもあるかもしれない。その時乳児は、母親は自分のことを大切にしてくれていないのではないかと、不信に思う。しかし生活全般をとおして相対的に不信感よりも信頼感が凌駕すると、乳児は心地よく、安心して生活できると認識する。この例示は、多くの子どもと保護者が経験することで特別な事とは思えないが、この段階で保護者自身が経済的困窮や精神的疾患等で日々の生活でゆとりのない状況に陥ってしまうと、慢性的に子どもにとってはストレスフルに満ちた環境の中で生活することを余儀なくされ、子どもは基本的信頼よりも不信が凌駕することになる。

基本的信頼の形成というのは、自分の存在が相手の心の中に存在していると認識することである。つまり相手の中に自分のことが思いとどめられ、そして大切にされている、と思うことが基本である。

そしてこの基本的信頼が核になり、人が本来持っているエンパワメントを沸き上げ、困

難な局面に直面し挫折しても回復していく力（レジリエンス）を発揮し、各段階に進んでいくことをE.H エリクソンの心理社会的段階は示している。

E.H エリクソンとJ. ボウルヴィー、A. マズローの関連性をみると、E.H エリクソンの第一段階「基本的信頼 vs. 不信」は、J. ウルヴィーの第一から第三段階までの期間に匹敵するものであり、A. マズローの「生理的欲求の充足」「安心、安全欲求の充足」「愛情、承認欲求の充足」の段階に匹敵するものである。

そして次の第二段階「自律性 vs. 恥、疑惑」では、幼児は行動範囲が広がり、様々なことが出来るようになる。この時期の最たる課題は排泄の自律である。最初は失敗し、お漏らしをしてしまう。幼児からすれば恥ずかしい思いをし、時として母親から怒られるなどをとおして、自分のことを可愛く思っていないのではないかという気持ちがよぎる。それでも第一段階での信頼感に支えられ母親から励まされ、そして排泄に成功すると喜んでくれる母親の姿を間近に見、意欲的に括約筋を調整し、排泄が出来るようになっていく。

第一段階において「不信」が上回ってしまうと、排泄課題に対して括約筋をコントロールする「自律」よりも「疑惑、恥」の思いを強くし、自分のことを大切にしてくれない保護者へ疑いの目を向け、喜ばせたくない気持ちから失敗（恥をかくことを選択）の日々を長く続けることになる。このことは、J. ボウルヴィーの第四段階の「特定の人の意図をくみ取り、そして自分の気持ちとの調整を図るようになる」ことの正反対の行動とも言える。

A. マズローの「自尊感情の欲求」との関連性で言うのなら、自分は価値のない存在と思い、保護者の気持ちを理解したとしても、実際場面では保護者の思いに無関心になり、失敗し手を焼かせることになる。

更に第三から第八段階まで年齢と共に課題は異なるが、いずれも対課題のどちらに偏るかは、第一段階の「基本的信頼 vs. 不信」に依拠していると言える。つまりその後の各段階の各課題は前課題に従属し、順次上乘せされていくことになる。そしてその人が保護者となったとき、自分の中に積み上げてきたもので子育てをする。そしてその中で、子どもは「基本的信頼 vs. 不信」の対課題のどちらかに偏っていくことになる。このことをE.H エリクソンは相互性と言っている。その相互性を成り立たせているのは三項関係であり、世代間連鎖の考え方である。

3 虐待の世代間連鎖

(1) 虐待の世代間連鎖

E.H エリクソンの最初の課題である「基本的信頼 vs. 不信」は、保護者の提供する養育環境への子どもの認識である。ポルトマンが言うように“人間は生理学的早産”なので親の養育に全面的に委ねられることになる。それゆえ人生の初期段階において、良きにつけ、悪きにつけ親の抱えているものが子へと引き継がれていくことになる。

事例1は、三歳の男児がウサギ籠に入れられ死亡した事件をもとにフィクションとして作成したものである。

事例 1

正夫くん（仮名 三歳）がウサギを飼育する籠に入れられ、そして口にタオルを巻かれ窒息死した事件が起こった。家族構成は養父、母、正夫くんの三人だったという。

母は高校三年時に高校を退学し、付き合っていた男性との間に正夫くんを生んだ。母親の祖母は、母親が一歳の時に離婚し、再婚離婚を繰り返し、母親が家にいたときは二度目に再婚した養父であった。母親は、祖母や二人の養祖父から虐待を受けており、一日も早く家を出たいと思っていた。母親は、祖母との関係は不良で、交流を一切取ろうとしなかった。

正夫くんの父親は、定職に就かず生活保護受給で生活していたが、交通事故で死亡してしまった。父親の事故死後、母親はホストクラブに通い詰め、そこで知り合った男性と結婚し、母親子どもの三人の生活が始まった。

ホストクラブで知り合った男性も、自分の父親から虐待された体験を持ち、中学卒業と同時に家を出て、職を転々としていたという。三人の生活の生活基盤は生活保護費であったが、養父、母親共に浪費が激しく、複数の消費者金融等からの返済も滞っていた。

正夫くんには発達障害があり、外食に連れて行ってお腹いっぱいになった後でも、帰宅後、砂糖やゴマ油、生のシシャモを食べることもあったという。そして多動で、養父、母親共に手を焼き、それへの対応として動きを制限するために籠に入れ、また勝手に物を食べないように口にタオルを巻いたという。

出所：新聞記事をもとに筆者が作成したフィクション

事例を見る限りでは、母親も祖母や養祖父から虐待を受けており、養父も祖父から虐待を受けた経験をしている。そして養父、母親共に正夫くんに虐待をしていることから世代間連鎖が必然的に起こっていることを想起させる。

この事例を考える際、母親は祖母、養祖父から、養父は祖父から虐待を受けていた経緯があることは大きなことであるが、しかしその側面に注視し過ぎるあまり、虐待の世代間連鎖をこの事例の原因とするのは適切ではない。よく虐待による事故が起こった後のテレビ報道で、ベランダに子どもの可愛い洗濯物が干されている場面や玄関の前に三輪車やおもちゃが置かれている映像が映し出される。これは、保護者の子どもへの愛おしさの現れ的一端だと思われる。カウフマン等は、子どもを虐待する原因を虐待の世代間連鎖とするのではなく、家族を取り巻く様々な要因と保護者の虐待体験との交互作用の結果とみることを提言している。

（２）虐待の世代間連鎖への反論

相談現場にいと、虐待する保護者の話や新聞紙上で子どもを死に至らしめた親の幼児期の情報をみるにつけ虐待の世代間連鎖を彷彿させられる。そして 2016 年 3 月 24 日のラジオ報道で「昨年一年間に虐待が疑われるとして、全国の警察が児童相談所に通告した 18 歳未満の子どもは、前年より 8097 人多い 3 万 7020 人だったことが、警察庁のまとめで分かった」という内容が流れた。年々増え続ける児童虐待、そして世代間連鎖が起こるな

らばネズミ算のように日本中席捲されていくことになる。

しかし、そのことに対してカウフマン等は文献研究をとおして「被虐待児は虐待親になるのか？」⁽¹⁾という論文で、虐待の世代間連鎖の考え方に疑問を投げかけている。以下はその内容を要約したものである。

『ここで紹介する研究は、ハンターとキルストームが、新生児 282 人の親と面接したものである。その子は未熟児や病弱なために地区の集中保育室にはいつている新生児である。親の幼児期の様子、望んだ妊娠か否か、家族と周りの人との関係に関する情報が、収集された。この研究で、虐待は明らかな虐待と同様、ネグレクトの傾向も含めるものとされた。生後一年間に州中央福祉事務所に記録された虐待若しくはネグレクトの報告が、現在の虐待状態との関係性を見る際に使われた。

最初の面接では 49 人の親が児童期に虐待やネグレクトの体験を受けていた。1 年後、9 人の親が虐待をしていると認められ、40 人の親は児童期に虐待経験を持っているにもかかわらず、子どもには虐待をしていないとされた。この調査での世代間連鎖率は、9 / 49 の 18% であった。この調査では、40 人の親が虐待の再生産を断ち切っているとされている。

虐待の再生産を断ち切っている親は、次のいくつかの点で実際に虐待をしている親と区別された。つまり、①より幅広い社会的支援を受けている。②妊娠について素直に喜び生むことへの迷いが無い。③生まれてき

た子どもたちは五体満足である。④児童期に受けた虐待に対してあからさまに怒りを表明できる。⑤これらの体験を詳細に説明できる。⑥彼らの両親のうちのどちらか片方から虐待を受け、そして他方の親とは支持的な関係があると報告していることが多い。

しかしながらこの研究は、①病弱な子どもを持った親というサンプルの特殊性、②データは委託機関によって行われたものであること、③一年に限って行われたことから一般化することは難しい。

こう言った問題はあるけれど、被虐待児の親の児童期に遡って、その親が被虐待児だったか否かを明確にすることへの警告と、親が被虐待児であっても、その親が自分の子どもに虐待をしていない部分を明確にするような調査計画を立てることの卓越さを示している。

結論として、虐待は循環するという考え方にある種の真実はあるけれど、世代間連鎖する虐待の見込みを消失させる多くの因子がある。子どものときに不適切な扱いを受けたということは、親になったときに子どもを虐待するようになると言ったりリスクはあるけれど、それは回避出来ることである。

過去において、無条件に受け入れられていた世代間連鎖仮説は、多くの否定的な結末をもたらした。子どものときに不適切な扱いをされて親になった人は、神からのお告げを叶えるために自分の子どもを執拗に虐待すると言われていた。循環を断ち切った多くの親は、四六時中爆弾を抱えているような感じを拭き去っている。

さらに世代間連鎖の考え方は、虐待の原因

を理解していくうえでの妨げとなっている。そして公平かつ社会的な介入する際に、間違った方向への展開となる。近年、研究者達は、世代間連鎖神話を無視するようになり、「虐待された子どもは、虐待親になる？」という問いかけを辞め、その代わり「どんな条件の下で、虐待の連鎖は起こりやすくなるのか？」と言う問いかけに変わってきている。』

保護者自身に虐待体験があると、自分の子どもを虐待し易くなるということはあるかもしれないが、同じような条件下にあっても虐待しない保護者もたくさんいる。そこでカウフマン等が言うように“どんな条件の下で、虐待の連鎖は起こりやすくなるのか？”に着目することは有意義なことである。事例1では、母親、養父ともに幼児期に保護者からの虐待体験を持っている。それゆえ、二人とも正夫くんに虐待をしたと直線的に結びつけるのではなく、その二人の虐待体験を誘発しているものがある。それは、ひとつ目は浪費等により生活費を消費者金融から借り入れ、返済出来ずに取り立てられ不安定な生活状況にあったこと、ふたつ目は正夫くんが発達障害があり養育上の困難さがあったことなどが考えられる。

また、なぜ最低生活が出来るだけの生活保護費が支給されているにもかかわらず現実検討力をなくし浪費するかに関しては、養父、母の虐待体験に関係していると思われる。つまり、二人とも A. マズローの欲求階層説の欠乏動機付け（生理的欲求、安心安全の欲求、愛情・承認の欲求）が十分に満たされなかつ

た結果、自尊感情も低くなり、その結果、先行きの見通しももてず、計画的に物事に取り組む気持ちも希薄になり、支給された生活保護費を浪費し、生活困窮に陥ったものと思われる。

（3）虐待を誘発する主な要因

社会生活では何らかのストレスが点在している。それには対人関係のもつれ、配偶者の異性関係、精神疾患、貧困、借金の返済取り立て、そして養育上の悩みなどが挙げられる。いずれも家庭生活に波紋を起こす可能性があるもので、それらが、虐待を誘発することがある。本稿では、ストレスの中から経済的貧困そして子どもの養育上の悩み（子どもとの関係が結びにくい）の二つを取り上げる。

① 経済的貧困

貧困線という言葉がある。それは、国民の等価可処分所得の中央値の二分の一のところの所得額を指し、それ以下にある場合を貧困と定義し、その中で18歳以下の子どもが占める割合を子どもの貧困率としている。子どもの貧困率が六人に一人と言われている。貧困線以下にある家庭の保護者が全て虐待している訳ではなく、家族が協力し、生活を切り詰めている家庭もたくさんあると思われる。しかし、そのことが引き金となって子どもに虐待している保護者もいる。保護者の気持ちを察すると、勤めていた会社が倒産し職を失った、リストラされ収入がなくなった、さらに就労先を探してもなかなか雇用されない、そのため借金をし、返済に滞りが生じる。

そういう中では夫婦はいがみ合い、すさんだ生活が推測でき、借金の取り立てや返す目途のない絶望感のもとで保護者が協力して子育てなど出来るはずもない。さらに保護者自身が虐待体験などのつらい思いをかかえていると、それがネグレクトなどに繋がっていくことがある。

② 発達障害等で愛着が付きにくい

A. マズローが示した第1から第4段階の過程は、すべての人は周りの人との関係で愛着を結ぶ力を持っていることを示している。しかしながら、生来的に愛着が付きにくい子どもや生育過程の中で愛着が十分に育たずに成長していく子どもがいる。前者は事例1の正夫くんである。正夫くんは障害を背負って生まれてきたために、愛着が付きにくいのである。その結果、子どもは保護者にとって理解し難いことをたくさんする。事例1では、保護者がダメと注意しても“お腹いっぱいになった後でも、帰宅後、砂糖やゴマ油、生のシシヤモを食べる。多動で、養父、母親共に手を焼き”、そしてその子どもの行動を力ずくで抑えようと“動きを制限するために籠に入れ、また勝手に物を食べないように口にタオルを巻いた”と言う。

さらに、発達障害がなくても愛着が付き難くなることもある。それは、保護者が離婚再婚を繰り返すときに起こる。離婚再婚を繰り返すこと自体には何ら問題はない。問題は、再婚の目的が保護者自身の心の拠り所を最優先している時である。そのような状況では、保護者は子どものことを眼中に置かず（ない

がしろにし）、そのために保護者と子どもの間に愛着が形成され難くなることがある。この愛着が形成されないことで、子どもは保護者の意に添わない行動（して欲しくない行動）をすることがある。その結果、子どもはしつくと称して叩かれ、怒鳴られることになる。事例1の正夫くんの母親がまさにそうだったと思われる。祖母の度重なる離婚再婚の繰り返しで、正夫くんの母親は祖母や義祖父との間に愛着が十分育たず、祖母や義祖父からすれば育て難い子どもだったことが推測できる。その結果、祖母や義祖父から虐待されたと思われる。そのような環境で育った母親は、自分のことを受けとめてくれる人に出会いたいという気持ちから高校生の時に付き合っていた男性との間に子どもを身ごもり、そしてその男性が事故で死亡した後も、ホスト通いをして自分を支えてくれる人を捜し求めていることが推測できる。

理由の如何に関係なく愛着が結びにくいということは、子育て、子育ちをしていく上で大きなストレスになることがある。そのストレスが、保護者自身の虐待体験などのつらい思いを呼び起こし、子どもへの虐待に繋がっていくことがある。

このように考えると、正夫くんの保護者は、もともと虐待を引き起こすリスクを持っていたが、誘発要因（消費者金融からの取り立て、正夫くんの障害による関係のとりづらさ）により保護者の持っている虐待体験からくるつらい思いを触発し、子どもへの虐待になったと考えられる。

(4) 補償要因

(3) では、虐待の世代間連鎖が自動的に起こるのではなく、保護者の虐待体験を誘発する何らかの要因があることを取り上げた。しかし、虐待体験を持っている保護者の中には、誘発要因があっても子どもを虐待しない人もいる。それは、カウフマン等が言っている『①より幅広い社会的支援を受けている。②妊娠について素直に喜び生むことへの迷いが無い。③生まれてきた子どもたちは五体満足である。④児童期に受けた虐待に対してあからさまに怒りを表明できる。⑤これらの体験を詳細に説明できる。⑥彼らの両親のうちのどちらか片方から虐待を受け、そして他方の親とは支持的な関係がある』^(1再掲) という補償要因がある人である。さらに付け加えたいのが、出会った友人や伴侶などに自分が受けとめられ自尊感情を回復した人である。

虐待をしてしまった保護者には、様々な支援をとおして自身でこのいずれかの補償要因を獲得できるようにすることが必要である。

4 社会診断について

児童相談所では、家庭の在り様を明確にし、支援の糸口を明確にすることを社会診断という。これらは、心理診断（子どもの心理学的な視点から見ていくこと）、行動診断（一時保護所での日常生活をとおして、子どものことを見ていく）そして医学診断（医学的側面から子どもを見ていく）などと一緒に児童相談所の業務で行われ、それらの診断を総合して子どもの処遇が図られている。それゆえどの診断の側面も重要で欠かすことが出来ない

が、虐待相談に関して優先順位をつけると、私は社会診断をまずは取り上げたい。その理由としては、子どもを養育することは、良きにつけ悪しきにつけ保護者の生活物語の中に子どもを引き込むことと言える。そしてその保護者の生活物語は、自分の親との関係（良好、不良など）、経済的基盤、そしてその家族を取り巻く様々な人（友人など）との関係、就労している職場や支援を受けている機関等との関係性が織り込まれているものである。その生活物語を的確に把握し、意味づけをするのが社会診断である。その的確さが、最終的に子どもの最善の利益につながるか否かが決まってくる。

社会診断を効果的なものにする取り組みのひとつにエコマップがある。以下はアン・ハートマンの「家族関係の図示的評価」⁽²⁾の部分引用である。

『エコマップとは、紙と鉛筆による単純なシュミレーションで、評価、援助計画の立案、介入の方法を検討する道具として開発されたものである。それは力動的な方法で生態システムを描いていく。つまり、生活空間における個人や家族を取り囲む境界を描いていくのである。マップに包含されるものは、主なシステムである。それには、家族や家族を取り巻く様々なシステムとの関係性が入っている。エコマップは家族の置かれた状況を表現している。それは家族と環境間の重要な滋養性、あるいはストレスに満ちた関係性を描いている。それは資源の流れや欠乏、剥奪の状況を示している。作図の仕方は、家族と環境

の結びつきを明らかにし、そして介在する葛藤や再建にむけての橋渡しや流通可能な資源を明確にすることである。誰がやるにしても一枚の紙と鉛筆が必要である。紙には、複数の空白の円が描かれているが、利用に際しては時間がかからない。このマップは、個人や家族に作成して貰うと言った方法で使うことも出来る。

エコマップの描き方は、まずマップの中央に大きな円で核となる家族をかく。男性を□、女性を○として描く。家族関係は伝統的な家系図やジェノグラムと同じ描き方をする。年齢は円や四角の中に書くといい。従って円の中に80と書いてあれば、80歳の女性を表していることになる。

紙面中央の大きな円に一家を描いた後、家族を取り巻く環境を付加していく。周りに書かれている空白の円には、ほとんどの家族にとって最も関わりある領域を書き込む。

例えば、仕事、親せき、リクレーション、健康、学校等々である。記載されずに残った円は、関わりが出てきた領域を書き込めるようにしておく。

家族と種々な領域の繋がり、線を引いて表す。繋がり、性質は、書き込む線のタイプによって表している。太線は重要な関係や強い絆を、点線は稀薄な関係を、ギザギザのついた直線は、ストレスの高い状態や対立関係を表す。関係性のエネルギーや関心の方向性は、繋がり、示す線に沿って矢印を書いて示している。』

図1は、事例1の正夫さんの家庭状況をエ

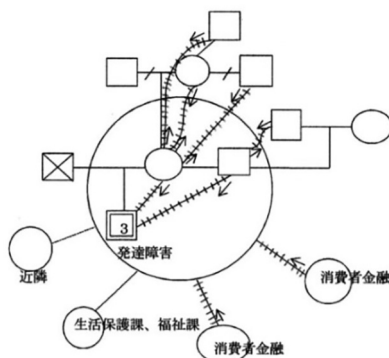


図1 事例1のエコマップ

コマップで図示したものである。以下の(1)から(5)は、事例1から家庭状況の記述を抜き出したものである。

(1) 母親と義祖父、祖母の関係

祖母は、母親が一歳の時に離婚し、再婚離婚を繰り返し、母親が家にいたときは二度目に再婚した養祖父であった。母親は、祖母や二人の養祖父から虐待を受けており、一日も早く家を出たいと思っていた。母親は、祖母との関係は不良で、交流を一切取ろうとしなかった

(2) 養父と義祖父の関係

自分の父親から虐待された体験を持つ

(3) 母と養父の出会い

父親の事故死後、母親はホストクラブに通い詰め、そこで知り合った男性と結婚

(4) 正夫さんと母、義父の関係

正夫くんには発達障害があり、外食に連れて行ってお腹いっぱいになった後でも、帰宅後、砂糖やゴマ油、生のシシャモを食べることもあったという。そして多動で、養父、母親共に手を焼き、それへの対応として動きを

制限するために籠に入れ、また勝手に物を食べないように口にタオルを巻いた

(5) 正夫くんの家庭の生活状況

生活基盤は生活保護費であったが、養父、母親共に浪費が激しく、消費者金融等からの返済も滞っていた

社会診断では、このエコマップに示された情報に基づいて子どもの処遇を考えていくことになる。処遇の選択肢として①在宅のまま正夫くんとその家族を支援する、②正夫くんを家庭から分離し、施設入所させた上で正夫くん、保護者への支援をする、③このまましばらく静観し、様子を見る等が考えられる。

このエコマップを見る限りでは、③は論外である。理由は、静観することへの説明が出来ないからである。①の在宅での支援も考えにくい。

理由は、貧困と正夫くんの養育し難さ（誘発要因）により、保護者自身が抱えているリスクを統制することの難しさと同時に誘発要因を抑止できる補償要因が見当たらないからである。それゆえこの事例では②を選択することが、正夫くんにとっては最善の利益を図ることになる。虐待の場合、子どもの死と言う結果が出た後に、“あの時こうすれば良かった”と過去に遡及するレトロスペクティブな見方がなされる。この場合、結果が分かっているのに、それに迎合する説明をすれば正解になる。

しかし、今まさに支援を開始しようとしている段階では、得られた情報をもとに仮説を立て、先の見通し（パースペクティ）をもっ

た支援が必要になる。死亡事例検証委員会が言っている“関わった機関の状況認識”とは、状況の認識を的確にし（収集した情報から誘発要因並びに補償要因を明確にし）、それを踏まえての具体的な支援策をたてることを意味している。

また、死亡事例検証委員会の“情報共有”は、この状況認識に基づいてなされるものである。現行の児童福祉法では情報共有を図る制度として、三層構造からなる要保護児童対策地域協議会が多くの市町村で設置されている。その中でなされる情報共有とは、①客観的事実（保護者の成育歴、離婚再婚歴、病歴、子どもの状態、経済状況など）の共有、②問題とされていることの意味付け（誘発、補償要因）の共有、③具体的な支援（処遇の対応や方向性）の共有が三位一体となったものである。そして、その情報共有に基づいてそれぞれの機関が、役割を果たしていくことになる。それゆえ、“関わった機関の状況認識”は、関わりの中で変化していくものであるが、それに密接に結び付いた“情報共有”が必要になってくる。そういう意味でこの二つは、車の両輪の関係にあると言える。

5 虐待児並びに保護者への支援

児童相談所が行う子ども並びに保護者の支援を大別すると、在宅での支援と家庭から子どもを引き離し、児童養護施設等へ入所させる支援の二つになる。さらに子どもの施設入所支援も保護者の同意によるものと、裁判所の審判結果に基づく入所に分かれる。

(1) 在宅支援

虐待を誘発する要因の他に、それを抑止する補償要因が認められることがあるとき、関係機関等で保護者支援をすることで問題の改善が期待できる場合、子どもを在宅のまま保護者支援することが考えられる。その際、使われる方法として以下の三つが考えられる。

ひとつ目は、ペアレント トレーニングである。この技法は、学習心理学を基礎にした行動療法的な考え方で、良い結果（ほめる、エコノミークーポンを使う）、悪い結果（例えば、テレビのチャンネル争いを子どもがしたら、30分テレビを消すなど。ただし、このことは前もって子どもに話しておく必要がある）などを使うものである。この考え方は、子どもを保護者の思うとおりに操作しようとするものではなく、保護者自身が子どもとの関わり方のトレーニングをすることで、叩いたりして子どもの行動を修正するのではなく、より良い関係の中で保護者、子ども共に快適に過ごせるようにするものである。このトレーニングに先立って、保護者自身が支援者から様々なつらい思いを受け止められることが大前提である。

二つ目は、ピア カウンセリングである。子どもの養育の仕方に困りはてた保護者同士が話し合うことで、互いの思いを同じ目線で話し合い、支えあうことで、過去に負った虐待について自分の親がそうせざるを得なかったことを受けとめ、許容することが出来るようになる。

三つ目は、支援者と保護者が個別に面接する方法である。支援者は、保護者の困惑した

気持ちを察したうえで、話を聴くこと、受けとめることが基本である。話を聴いていく中で支援者は、保護者の子どもへの不適切な行動の機序が描けることがある。しかし支援者はそれを心のうちに秘め、ひたすら保護者の話に耳を傾けることで、保護者自身が支援者の描いた機序にたどり着き、洞察することが多いからである。

(2) 施設入所による支援

子どもを家庭から引き離して施設入所させての支援には、大きく分けて二つに分かれる。ひとつ目は、保護者が子どもの施設入所を同意している場合である。二つ目は、児童相談所の採る施設入所処遇に同意せず、そのために児童相談所が家庭裁判所に申し立てをし、裁判所の決定により施設入所となる場合である。いずれも子どもの施設入所という点では同じであるが、保護者の児童相談所への気持ち（協力的か拒否的）という点では大きく異なり、支援の仕方が違ってくる。

① 保護者の同意による施設入所

子どもが施設に入所する時、児童相談所長は総括指針に保護者や子どもに関わる際の留意点を記載しているが、それはあくまで児童相談所と入所先の施設間のもので、一般的には保護者・子どもには知らされないのが普通である。しかし入所に先立って保護者や子どもに対して、「一時帰省や家庭引取りの評価項目」を提示することは必要である。このことは、子どもの権利でもあるし、保護者の権利でもある。

虐待児とその保護者支援に向けて

そのために保護者、子ども、施設職員そして児童相談所職員間で「一時帰省や家庭引取りに向けての評価項目」を話し合い、内容を共有し、家族の再統合に向けてそれぞれが自我定位できるような支援が求められる。

表1、2は、施設入所前に、保護者、子ども、施設職員と児童相談所職員が話し合った評価項目と内容を例示したものである。この評価項目は、施設入所後に半年に一度、施設で作成が義務付けられている児童自立支援計画と連動し、家族再統合へ向けて保護者、子ども、施設職員そして児童相談所が協働することが必要である。

表1 子どもの側面⁽³⁾

評価項目	内 容
注意集中及び行動統制	① 注意が集中できずにぼんやりしなくなる。
欲求不満への対処	自分の欲求がとおらないときでも、駄々をこねて大泣きしなくなる。
対人関係	① 友だちとより良い関係を作ろうとする際に、相手の気持ちを逆なですることがなくなる。 ② 大人に素直に甘えられるようになる。 ③ 本児が行った悪いことに叱られても以前のように自分で体に傷をつくったりしない。

表2 保護者の側面⁽³⁾

評価項目	内 容
養育意欲	① 今までの本児の行動を理解し、無理なく受止められる。 ② 一緒に生活したい気持ちが強くなる。
養育技術	① 面会時に、子どもが父親、母親に緊張しないで話ができる。 ② 面会及び帰省時に、子どもと接して、今までと違ってきていると感じ取れる。

② 家庭裁判所への申し立て（児童福祉法第28条）による入所

保護者との摩擦を避けたいと思っても子どもにとっては保護者との生活が最善でないと判断して施設処遇を決定することがある。勿論、児童相談所と保護者等の意見不一致の場合、児童相談所は第三者機関である児童福祉審議会に諮問し、客観性・透明性という過程を経て、再度保護者に処遇を提示することになる。

その段階で保護者から施設入所の承諾が得られない場合には、児童福祉法第28条の申し立てにより家庭裁判所の審判に委ねることになる。そして家庭裁判所の審判結果に基づいて施設入所となった場合、判決文に児童相談所の指導にのることという付帯事項が記されているが、保護者指導につながることは難しいというのが実情である。

児童相談所の指導の中には、「児童又はその保護者を児童福祉司、知的障害者福祉司、社会福祉主事、児童委員若しくは当該都道府

県の設置する児童家庭支援センター若しくは当該都道府県が行う障害者等相談支援事業に係る職員に指導させ、又は当該都道府県以外の者の設置する児童家庭支援センター、当該都道府県以外の障害者等相談支援事業を行う者若しくは前条第1項第2号に規定する厚生労働省令で定める者に指導を委託すること。」(1997年児童福祉法第27条第1項第2号)と言うものがある。これは、児童相談所が行う指導を外部等に委託出来るとするものである。

児童福祉法第28条によって子どもを施設入所させた場合、保護者にすれば、子どもの入所先も原則教えて貰えない、子どもの施設入所に同意していないのに児童相談所は無理やり施設入所させたという理不尽な思いを抱いているが普通である。それゆえ長期に亘って児童相談所との緊張関係が持続することがある。

児童福祉法28条による入所措置の場合、入所期間は原則2年である。その2年間で保護者等の指導をし、結果として家族再統合出来ない場合は、入所の再延長の手続きを裁判所にすることになっている。そのように考えると、持続する緊張関係にたいして有効策を考える必要が出てくる。その方法として、児童相談所以外の直接利害関係のない機関が指導することが考えられる。幸いにも第27条第1項第2号の条文では、外部等の機関(者)に指導委託出来ることになっているので、その条文に新たに医療機関やNPO法人を付加し、より効果的な保護者支援が出来るようにする必要があると思われる。

6 まとめ

最初に先人の研究をとおして「子ども期」の保護者との関係の紡ぎ方がいかに大切かを概観した。

二点目に虐待の世代間連鎖、三点目で社会診断の取り組み方について概観した。

保護者の中には虐待体験を持っていることもあり、その体験を内包したうえで生活物語を展開している。だからと言ってそのような保護者が、自分の子どもを虐待すると帰結するのは早計である。確かに結果として虐待することはあるが、それは単純な虐待の世代間連鎖ではなく、内包している虐待体験を誘発する要因があるという視点が必要になる。そして、同時に誘発要因と補償要因に着目し、子どもにとって最善の利益が図られるような判断が必要不可欠になることを概観した。

最後に子どもと保護者への支援について、在宅処遇、そして子どもを施設入所させた上での処遇など内容によってアプローチの仕方は異なるが、処遇ごとに支援法を概観した。

児童相談所等の支援には二面性(片方で握りこぶしを振り上げ、もう片方で握手をする)がある。特に児童福祉法第28条の家庭裁判所への申し立てにより施設入所させた場合は、その保護者と児童相談所間の緊張関係が持続することが多い。現状では、児童家庭支援センターの職員に指導委託させることが出来るが、今後保護者支援に関してNPO等の外部指導機関を付加する法整備が必要になると思われる。

《附記》

本稿の執筆に際し、元千葉敬愛短期大学
准教授の藤京子先生に助言をいただいた。紙
面を借りて感謝申し上げます

7 引用・参考文献

《引用文献》

(1) Kaufman,J&Ziegler,E

Do abused children become abusive
parents? Ame.J.Orthopsychiatry 57 (2)
April 1987 186-192

(2) Ann Hartman

Diagrammatic assessment of family
relationships Social Casework vol59. 1978
467 (r6) -467 (r13)

(3) 本山 芳男

虐待親、被虐待児への支援について
児童相談所紀要 千葉県児童相談所 第
8号 2003年 P25

《参考文献》

(1) 本山 他 里母 - 里子の愛着形成援助

の試み 児童相談紀要 千葉県
児童相談所 第1号 平成4年
P.87-116

(2) 本山 芳男 鎌倉 和子 望月 亜文

子どもの内的世界への接近
児童相談紀要 千葉県児童相談
所 第3号 平成6年 P.1-7

(3) 本山 芳男 被虐待児は虐待親になるの

か? 児童相談紀要 千葉県
児童相談所 第6号 2001年
P.29-32

(4) 本山 芳男 小川 朱美

被虐待児処遇へのエコマップ
の活用について 児童相談所紀
要 千葉県児童相談所 第7号
2002年 P1-8

(5) 本山 芳男 小川 朱美

虐待生起の要因及び対応 児
童相談所紀要 千葉県児童相談
所 第8号 2003年 P29-39

(6) 本山 芳男 虐待ケースに学ぶ 児童相

談所紀要 千葉県児童相談所
第10号 2005年 P1-15

(7) 本山 芳男 被虐待児支援に関しての一

考察 児童相談所紀要 千葉県
児童相談所 第11号 2006年
P1-11

(8) 本山 芳男 小川 朱美

職権一時保護の効用と課題
児童相談所紀要 千葉県児童相
談所 第11号 2003年 P12-
25

(9) 本山 芳男 リスクアセスメントシート

再考ーベテラン職員からのツボ
聴取に基づく試案作成ー 児童
相談所紀要 千葉県児童相談所
第12号 2007年 P7-12

(10) 本山 芳男 リスクアセスメントシー

ト(試案)をとおして見える
こと 児童相談所紀要 千葉県
児童相談所 第12号 2007年
P13-29

(11) 本山 芳男 身体的虐待の発生機序

児童相談所紀要 千葉県児童相

- 談所 第 12 号 2007 年 P1-6
- (12) 本山 芳男 被虐待児支援の中核としての評価の位置づけ 児童相談所紀要 千葉県児童相談所 第 13 号 2008 年 P1-11
- (13) 本山 芳男 被虐待児支援に向けての保護者との向かい合い (Confrontation) 児童相談所紀要 千葉県児童相談所 第 13 号 2008 年 P12-22
- (14) 山野 良一 子どもの最貧国・日本 光文社新書 2008 年
- (15) 湯浅 典人 エコ・マップの概要とその活用—ソーシャルワーク実践における生態学・システム論的視点— 社会福祉学 Vol31 1992 年 P119-143